

体育授業における子どもたちの想いと教師の願いに関する研究

宮本 和可奈 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)

指導教員 柴田 俊和

キーワード：体育授業 充実感 実態認識

1. 緒言

筆者が今まで受けてきた体育授業の中で、充実感が得られた授業とそうではなかった授業がある。この経験から、体育授業において充実感が得られるということと、その得られた充実感の度合いが授業に対する意欲に大きく関係していることに気付いた。また、教師が子どもの充実感を得ている実態を認識していることも重要である。そこで、体育授業において子どもたちが充実感を得ている実態と教師が考えている子どもたちの充実感が不一致だと、子どもの学習意欲低下につながったり、子どもに合った指導が難しくなったりするのではないかとの考えから本テーマに取り組むことにした。

本研究では、「体育授業において子どもたちがどのようなことで充実感を得ているのか」と、「教師が考える子どもの充実感」について調査し、その結果から、男女差や年齢差による子どもの充実感の違いなども明らかにする。さらに、子どもに充実感を与えるために、教師はどのように指導を行うべきなのかを提案したい。

2. 研究方法

本研究の調査対象は、奈良県の中学校2校の全生徒897名(男子453名 女子444名)、保健体育科の教員6名であった。

教師用のアンケートは、体育授業において子どもたちが感じている充実感についてどのように考えているのかを調査した。中学生用のアンケートは、実際に体育授業で生徒たちが得ている充実感について調査した。

3. 結果と考察

調査結果から、生徒が充実感を得ている実

態と教師が考えている生徒の充実感はどちらの中学校も一致し、筆者の理想の結果となった。充実感の質の違いとして、女子は「友達と共に活動するとき」に充実感が得られやすい。それに対し男子は「ゲーム感覚の授業をするとき」に充実感が得られやすいことが明らかになった。また、年齢差による充実感が得られる理由については、13歳が「新しい運動や内容に入ったとき」、15歳が「友達と一緒に活動するとき」という違いが現れた。生徒の調査結果から、充実感が得られる体育授業の要素として、「運動ができるという感覚を十分に味わわせること」「グループ活動を取り入れること」「授業開始以前に生徒たちの運動能力の把握ができていないこと」「生徒が楽しく学ぶことができること」の4つの条件を導き出した。

4. まとめ

生徒が充実感を得られる体育授業について4つ要素を導き出したが、どれも教師が常に心掛けておかなければならない基本的な条件である。特に「運動が出来る感覚を味わわせること」は、保健体育教師にとって常に達成しなければならない課題でもある。また、充実感に年齢差、男女差があることについても認識しておかなければならない生徒の実態である。本研究で得られた成果をもとに、子どもの実態を把握しながら、充実感が得られる体育授業を作っていきたいと考えている。

参考文献

小林篤(2004) 体育授業の基礎基本 体育科教育第52巻第4号 大修館書店 pp.9

